

看護師職能委員会 II

だより

2024.9
第7号

「生きる」を支える

長野県立木曽病院・介護医療院

看護師 しんざと 新里 わたる 渉

「口から食べたい…」寄り添う力

脳出血後遺症で経鼻胃管が留置されたまま他医療機関より転院してきた60歳代男性です。

重度の失語症もありコミュニケーションが図れない状態でした。経鼻栄養の長期化が予想されたため、胃瘻造設の方針となりました。

しかし、その男性は身寄りがなく医療者で意思決定をしなければなりません。倫理的課題をクリアし胃瘻造設に至りました。

徐々に反応が出てきたところで経口摂取を希望されました。当初の評価では難しいと判断されましたが、諦めず訓練を継続。嚥下機能はなんとか保たれている

と判断されました。

そこで、お楽しみ程度の介助摂取を続けていきました。嘔気があり食事量は期待できません。胃ろうからの栄養注入だったのですが、根気よく寄り添い続けていく中で、食事を全量摂取することができるようになりました。

また、今では胃ろうを使用することなく麻痺のない健側の手で全量自力摂取することができています。笑顔も見られるようになりました。

寄り添う必要性を強く感じました。



療養病棟・介護医療院のみなさん

その人らしい生き方を支える

認知症高齢者の自己決定支援

患者・家族のQOL向上を目指した病院との連携

認知症対応型共同生活介護
グループホーム陽気

脳卒中リハビリテーション看護認定看護師

すぎやま

杉山

しんたろう

慎太郎

90

歳代女性。認知症グループホーム（以下 GH）に入居中の方です。認知症高齢者の日常生活自立度判定基準：Ⅲ b、Barthel Index（以下 BI）：40 点、Mini-Mental State Examination：1/30 点。室内で転倒し、左大腿骨転子部骨折。救急外来で医師から、認知症が重症であり、術前検査に抵抗があるため、手術をせずこのまま経過観察してみてもどうかと家族へ説明がありました。家族は、再度歩けるようになってほしいと願い、施設看護師へ相談。施設看護師は、今までの経験から手術をすればもう一度歩ける可能性が高いと予測し、家族へ伝えました。家族からは、医師からのインフォームドコンセント（以下 IC）を一緒に聞いてほしいと依頼がありました。

看護小規模多機能型居宅介護事業所での支援

思いをつないで

ニチイケアセンター篠ノ井中央訪問看護ステーション

なかそね

中曾 祢

すみこ

澄子

あ

る日、事務所の電話が鳴りました。電話の相手はお世話になっている地域包括支援センターの看護師さんからでした。「大腸がん末期の男性で、肺にも転移している。ご本人は積極的治療を望んでおらず、家族も本人の意向に添いたいと考えている。最終的には緩和ケア病院だがそれまでの在宅生活を支援して欲しい」との依頼でした。

ご本人はサービスを望みませんでした。そこで主治医を訪問診療医に変更し、訪問看護の支援からスタートとなりました。訪問当初から食事摂取量は少なく、倦怠感もあることから臥床していることが多い生活を送っていました。「できる内は自分でやりたい。風呂は好き。一人で大丈夫」との意向もあり、腹水のある大きなお腹を抱えながらも大好きなお風呂に自分のペースで入られていました。

徐

々に病状が進行し、いよいよ自宅でのお風呂も難しくなってきました。訪問入浴という方法もあることをお伝えするが、ご本人は難色を示されました。ご家族より「温泉に行くことが好きだった。外のお風呂に入りたいですよね…」との言葉がありました。主治医やケアマネジャーとも相談し、デイサー





※ 掲載写真は全て御本人等の許可を得ています。

施 設看護師は、医師へ利用者・家族の代弁者としてその想いを説明し、術前検査を手伝うこと、術後の予後予測と退院後のできるだけ早い再入所について約束し、医師は手術を了承しました。救急外来での術前検査では、検査を手伝いながら利用者のBPSDの出現が最小限になるように、入居者の手を繋いだり、本人の好きな歌を歌ったりしながら、声を掛け、注意ができるだけ処置に向かわないように環境調整をしました。

その後、翌日の手術を終え、2週間程度の入院で施設へ再入所。BI：40点で変わらず、歩行も可能となりました。家族も、ICの際、施設看護師に相談し、手術ができて良かったと反応がありました。

今回の事例から、本人の意思決定と家族の希望をGH看護師が代弁者となることで、治療の選択肢を増やし、利用者・家族のQOLの向上につながりました。



手術後の様子



ビスを利用することになりました。デイサービスのお風呂を気に入り、それを楽しみに過ごされていましたが、更に病状が進み、受け入れ先のデイサービスではリスク管理の部分から利用検討を提案されてしまいました。そこで、訪問看護で関わっている当事業所の看多機で支援することとなりました。

大好きなお風呂目的のみで通いサービスを利用しながら、訪問看護でサポートを続けました。病状の進行により在宅では厳しい状況となってきたころ、ご本人から入院の意向があり、緩和ケア病院への入院となりました。入院に当たって情報提供を行う際、ご本人が望んでいる「お風呂に入りたい」という思いを伝えました。

入 院後2週間ほどしてご家族から逝去の知らせを受けました。「入院中は大好きなお風呂にも入って、アイスクリームをおいしいと喜んで食べたりしていました。家では訪問看護さんに看てもらって心強かったし、お風呂にも通って喜んでいました。いい時期に入院できました。父の思い通りのことができたと思います。私たち家族もやれることはやれました。」と悲しみの中にも満足した気持ちが伺い知れました。

数日後、緩和ケア病院から入院中の情報が書かれたサマリーが送られてきました。ご本人の「お風呂に入りたい」という思いをつなぎ叶えてくださったことが書かれていました。それぞれの場所で、それぞれの看護職がその人に寄り添い、思いをつなげていくことができることを実感したケースでした。



ガーデニング



鯉のぼり運動会



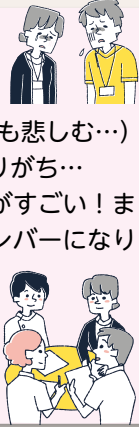
足浴

(写真は、当事業所で過ごされている利用者の方の様子です。)

看護師職能委員Ⅱ「あるある」

スタッフあるある

- ・ 休憩時間は家族の情報交換でもちぎり（まるで家族の一員！！ペットの死までも悲しむ…）
- ・ 車での移動が多いため？ふくよかになりがち…
- ・ 困難な事例ほど多職種チームの結束力がすごい！まるで部活！そして顔ぶれがいつものメンバーになりがち（言い換えれば信頼が厚い、腕を見込まれているのか？と、自分を励ます）



利用者さんあるある

- ・ 歩けないというけれど、デイサービスではスイスイ元気アピール
- ・ 長年会っていない隣人とデイサービスで涙の再会
- ・ 楽しいデイサービス、早起きして早朝4時スタンバイ OK
- ・ 病院ではお粥、今日は退院、好物のカツを依頼
- ・ コロナ禍も家族に囲まれ逝く（旅立つ）



2022年度から「在宅看取り語りの場」を開催しています

～「在宅看取り語りの場」とは訪問看護師が地域の皆さんと在宅看取りについて語り合う場所です～

「在宅看取り語りの場」を開催して

訪問看護ステーションしらかば さかい 坂井 さとみ

その人らしく在宅でも最期まで暮らせることを知っていただき、自分や家族の今後の事を考えるきっかけの場として「在宅看取り語りの場」を開催しています。当ステーションでは現在まで3カ所で開催し、男女問わず、色々な年代の方にご参加いただいております。

まず訪問看護師が体験した在宅看取りについて語り、その後、参加された方々に自身が経験した介護や看取りについて語っていただきます。経験したことを語ることで気持ちの整理がつき、すっきりしたと話される方や、現在介護で悩まれているという方には、参加者同士でアドバイスし合う場面も多くありました。

参加者の方からは、「普段の会話では話しづらい看取りについて話をする前提での会なので、話題も出しやすくよかった。」「皆さんそれぞれ大切な方の看取りを経験されており、満足されている方ばかりではなく悔いが残っている方もいることが再認識できた。自分自身、人生幸せだったから大丈夫よと家族に伝えておこうと思う。」「訪問看護師さんから、実際の看取りのお話を聞くと、支えがあれば私にもできるかも、と思える方がずっとたくさんいると思う。」「何が何でも家で看るのが在宅看護ではなく、いろいろな人や機関・サービスに頼りながら、みんながある程度納得して旅立てる良さ、すがすがしさが伝わった。」「普段の何気ない会話からでも最期について話し、意思を尊重したいと強く思った。」「まだまだ訪問看護は知られていないと思うので、友達にも今日の話をしたい。」「訪問看護師さんに支えられ、住み慣れた家で家族に見守られての最期も悪くないと思った。」など、たくさんの感想をいただきました。

経験や悩みをみんなで共有することができ、一人で背負わなくてもいいのだという安心感が漂うような感覚を毎回感じております。今後ますます、この取り組みが広がってほしいと思います。



お問い合わせ：長野県看護協会 訪問看護総合支援センター 090-1990-8469(直通)

看護師職能委員会Ⅱ委員

吉澤 美保・丸山 美由生・杉山 慎太郎・中曾 祢 澄子・松沢 育実・高橋 富美子・宮下 節子
(2024年6月) 藤田 千恵・東上 真紀・高池 光恵